宮崎大学教育文化学部紀要　人文科学　第18号（2008）13－32頁

「劉東山」小考

上原　徳子

A study of “Liu Dongshan” story

Noriko UEHARA

はじめに

本稿は、『初刻拍案驚奇』巻３「劉東山誇技順城門　十八兄蹤奇村酒肆」（以下『初刻拍案驚奇』巻３を「初刻・劉東山」、『初刻拍案驚奇』を「初刻」とする）の原話について、未紹介の資料及び従来とは異なる説を紹介し、検討を試みるものである。

そもそも、白話短篇小説集は、ここでとりあげる『初刻拍案驚奇』に限らず、その多くに元になる資料があることが指摘されている。小川陽一氏の『三言二拍本事論考集成（新典社、1981)』は、明代後期に相次いで刊行された「三言二拍（『喩世明言（古今小説)』・『警世通言』・『醒世恒言』と『初刻拍案驚奇』『二刻拍案驚奇』)」と呼ばれる白話短篇小説集に収められた全ての篇の本事源流について述べたものであり、現在でも、「三言二拍」を研究するにあたって、まず第一に参照するべきものである。しかし、小川氏の著書が出版されてから、20年以上が経過し、各篇についての研究は進み、1981年当時参照できなかった資料も続々と公刊されている今、『三言二拍本事論考集成』の内容は修正を余儀なくされる部分がある。

本稿でいう「初刻・劉東山」とは、特に『初刻拍案驚奇』巻３の「入話」、所謂「まくら」の部分を除いた「正話」部分を指す。この正話部分について、小川氏が前掲書で挙げた来源についての諸説は、いずれも宋懋澄『九籥集（あるいは『九籥別集』)』を原話の出典としている。この「劉東山」の故事の来源についてこれまで異議を唱える者はいなかった。

しかし、韓結根氏によって異説が述べられた。韓結根氏は『明代徽州文学研究[1]』所収の論文「《亘史》与“两拍”―“两拍”蓝本考之一[2]」で『二刻拍案驚奇』の原本問題について論じ、六篇を取り上げ検討しているが、その中に「劉東山」が含まれている。彼の主張は「『初刻拍案驚奇』の「劉東山」は『亘史』に拠った」というものである。

本稿では、まず初めにこの韓氏の説を紹介し、筆者（上原）の疑問点について述べたい。次に、その疑問点についての筆者の見解を示す。最後に、これまで取り上げられることの無かった劉東山について書かれた新資料[3]を紹介し、その後もう一度韓氏が主張する「劉東山」の作者は宋新なる人物であるという説について検討する。検討に当たって、『初刻拍案驚奇』並び

に各種の文言資料の全文を添付し適宜参照しながら論ずることとする。

本稿は、劉東山の各テキストについて検討するのが目的であり、話の内容については踏み込まないが、全く内容を紹介しないのは理解を妨げることもあると考え、あらすじを以下に紹介しておきたい。あらすじは宋懋澄の「劉東山」による。

> 嘉靖の時のことである。河間府交河県の人劉東山は、かつて北京郊外で盗賊を捕らえていた。彼は弓の名手であり、自ら「連珠箭」と称していた。たが、三十歳あまりで仕事が嫌になった。ある年の暮れ、都で驢馬を売った帰りに知り合いに会い、自分の腕前を大いに吹聴した。北京からの帰途、劉東山は一人の若者に出会い、同行することになった。その若者はすばらしい弓の腕前で、強い弓でも軽々と引いた。若者は初めは劉東山に敬服する様子であったが、突然態度を変え、劉東山を脅し金を要求した。劉東山は若者に屈服し、要求通り金を差し出した。その場を逃れて家にたどり着いた劉東山は、妻と酒屋（宿屋）を営み、静かに暮らしていた。三年後の冬、劉東山夫婦が営む店に男達がやってきた。彼らの中に第十八と呼ばれる不思議な人物がおり、みな彼を敬っていた。そして、その男達の中に、三年前劉東山から金を奪った若者がいた。若者を恐れる劉東山に対して、その若者は、劉東山が都で腕自慢をするのを聞いた仲間がおり、彼を懲らしめようとしてやったことだと、説明し、十倍にして金を返した。劉東山は彼らを引き留めてもてなした。そして、彼らは三日後に去っていった。

それでは、次節以降で具体的な論考を進めたい。

従来の「初刻・劉東山」原話についての説

「初刻・劉東山」については、これまで宋懋澄『九籥集』「劉東山」との関連が指摘されてきた[4]。（正確にいえば、「初刻・劉東山」の原話とされているのは、宋懋澄の『九籥前集』巻11稗に所収（後に『九籥別集』巻２稗に所収）された「劉東山」である。この『九籥集』については、拙稿で詳しく論じた。[5]）たとえば、王士禎(1634-1711)『池北遇談』巻22談異三「宋孝廉数学」に「宋には『九籥集』があり、稗官家による（稗官家が書いたような）劉東山・杜十娘のような事は、みな彼の文集の中に記載されている[6]」と述べられ、さらに『聊齋志異』巻三「老饕」には最後に「これは、劉東山のことを彷彿とさせる[7]」と述べられており、この話がある程度の範囲で知られた話だったことがわかる。特に、王士禎が、宋懋澄といえば「劉東山」と「杜十娘（白話小説としては『警世通言』巻32「杜十娘怒沈百寶箱」）」であると述べていることから、当時「劉東山」といえば宋懋澄という発想があったことが推察される。確かに、「初刻・劉東山」の正話部分は、白話と文言という違いこそあれ、内容はほぼ宋懋澄の「劉東山」と重なっており、これまで原話とそれに基づいた白話小説という両者の関係に疑問を挟む者はいなかった。

しかし、韓氏は「初刻・劉東山」を潘之恒の『亘史』所収の「劉東山遇侠事」に基づいたものだと述べた。韓氏は、その根拠として、『九籥集』・『亘史』・『初刻拍案驚奇』の文字を比較すると、『初刻拍案驚奇』の文字が『九籥集』とは異なるけれども『亘史』と一致する部分が五カ所あることを挙げている。

本稿ではまず韓氏の論文で指摘されている箇所をあらためて確認したい。なお、本文に付された番号は、付録の全テキスト掲載の表と対応している。

使用テキストについて

具体的な文字の検討に入る前に、本稿が使用するテキスト５種類を次に挙げる。

『初刻拍案驚奇』は、日光山輪王寺慈眼堂所蔵本（尚友堂刊本）を底本とする、ゆまに書房より刊行されている影印本（1986年）を使用した。

『亘史』は、韓氏の使った『亘史外紀』巻四侠部「劉東山遇侠事」を採用している。韓氏は四庫全書存目叢書に収められている『亘史鈔』ではなく天啓年間刊行の『亘史』をみているようである。なぜなら、四庫全書存目叢書『亘史鈔』では、「劉東山遇侠事」は『亘史外篇』豪侠巻１に収められているのに、韓氏の論文では一貫して『亘史外紀』巻４とされているからである。

『亘史』という書物については、韓結根氏が前掲の著書『明代徽州文学研究』の中[8]で、作者潘之恒のことも含めて詳しく述べている。今ここで韓氏と同様の内容を述べる必要はない。しかし、必要な情報を以下に記し、さらに筆者が付け加えたいことを述べる。

『亘史』を著した（編集したというべきか）潘之恒の字は景升といい、徽州の人である。嘉靖35（1556）年に生まれ、天啓２（1622）年に亡くなった。彼は商人の家に生まれ、若い頃から多くの知識人と交遊を結んだ。彼の知人の中には戯曲・小説に関わっていたものが少なくなかった。

一般に『亘史』といわれるものには、『亘史鈔』と『亘史』がある。四庫全書存目叢書に収められた浙江図書館蔵『亘史鈔』が最も簡単に見ることのできる影印本である。ほかに国立公文書館（内閣文庫）に『亘史鈔』と天啓年間の序文のある『亘史』の二種が所蔵されている。後者については以下「天啓『亘史』」とする。

四庫全書存目叢書に収められている『亘史鈔』は、浙江図書館所蔵のものである。顧起元[9]の序文によれば、もともとこの書は79目・980巻から成っていたという。現在は116巻しか残っておらず、元の巻数と比較すると９分の１ほどしか残っていないことになる。推測になるが、まず先に980巻の『亘史』があり、その一部が後に『亘史鈔』として出版されたのであろう。

四庫全書存目叢書に収められた『亘史鈔』には、まず総目があり、その後は「内紀」「内篇」「外紀」「外篇」「雑篇」「雪濤小書」「雪濤小説」の順で構成されている。

一方、国立公文書館蔵『亘史鈔』は全部で四冊である。浙江図書館蔵のものと比較すると、分量が少なく、その構成も違っている。まず、冒頭の顧起元の序文の後に浙江図書館蔵『亘史鈔』にあった目録がない。その後は、浙江図書館蔵本にあった「内紀」その他の部分が無く、あるのは、「亘史外紀」のみである。「亘史外紀」の内訳は、「金陵妓品」・「江南豔」・「呉豔」・「越豔」・「燕豔」・「楚豔」・「趙豔」・「淮豔」であり、これらはすべて妓女について書かれた文である。

この「亘史外紀」は、浙江図書館蔵本にも収められている。それと国立公文書館蔵『亘史鈔』の「亘史外紀」の内訳と比較すると、浙江図書館蔵本には国立公文書館蔵本にはみられない部分があり、収録された項目がより多い。この増加分（「寵愛」・「女侠」・「游侠」・「仙蹟」・「仙侶」）以外は国立公文書館所蔵本と浙江図書館所蔵本の共通部分ということになるが、そこで

も所収された話の順番が一致しておらず、また版心に記された巻数、葉数の表記が異なるなど、差異が認められる[10]。

さらに、国立公文書館には『亘史鈔』の他に『亘史』が所蔵されている。この『亘史』には、封面が残されている。封面には、中央に大きく「亘史」とあり、その右には「潘景升先生輯」、左には「鸞嘯軒藏板」とある。『亘史鈔』と全く同じ序文が収められ、その後は「総目」、続いて「目録」、その後は「亘史内紀」12巻・「亘史内篇」23巻・「亘史外紀」45巻・「亘史外篇」２巻・「亘史雑紀」５巻・「亘史雑篇」６巻の全93巻で構成されている。この『亘史』は、総目の最後に記されている文章[11]によれば、天啓６(1626) 年、潘之恒の死後に息子の潘弼亮によって出版されたものである。これが「天啓『亘史』」ということになる。

浙江図書館蔵『亘史鈔』と天啓『亘史』を比べると、天啓『亘史』は基本的に『亘史鈔』の内容を襲っているものの、元来『亘史鈔』にあった付録部分を削ったり、校閲者の名前を削ってすべて「天都逸史氷華生輯」とだけとするなどの違いがある。また、序文以外は『亘史鈔』より字形が美しく、印刷もはっきりしている。なお、『亘史』は、他に国家図書館（北京）・尊経閣文庫にも所蔵されており[12]、『亘史鈔』と天啓『亘史』との関係や、それ以前に存在していたと推測される『亘史』については、さらなる調査の後に稿を改めて述べたい。なお本稿は『亘史鈔』を使用した。

また、『九籥集』であるが、作者宋懋澄は字を幼清といい、華亭（現在の上海市松江）の人である。隆慶３（1569）年に生まれ泰昌元（1620）年に亡くなった。詳しくは拙論で述べている[13]ので、ここでは触れない。

『九籥集』は全47巻で、続修四庫全書、四庫全書禁燬書叢刊本に収められ、それらは上海辞書出版社蔵本と中国社会科学院図書館蔵本を底本とする。『九籥集』冒頭には、萬暦40（1612）年の李維楨[14]の序文がある。この他に、清初に刊行されたと考えられる呉偉業選の『九籥別集』４巻[15]が存在する。

ただし、韓氏は論文中では『九籥別集』をテキストとして用いている。『九籥前集』と『九籥別集』の文字の異同は殆どない。筆者はより古いテキストを利用するべきだと考えるので本稿では『九籥前集』を採用した。なお、次節で触れた各部分について二つのテキスト間の文字の異同はない。

さらに、『情種』全八巻がある。宋懋澄の甥宋存標によるもので、天啓６年の序文がある。宋存標の生没年は未詳。乾隆『奉賢縣志』巻４科第には、崇禎15（1642）年に貢生となったことが記録されているが、その後挙人になることはなかった。明の滅亡後は、隠遁生活を送ったと記されている[16]。『情種』は、宋懋澄の甥宋存標（字は子建）の編で全８巻、陳繼儒と宋存楠（徵璧）による序文がある。『情種』宋存楠の序文は天啓六（1626）年のものであるから、刊行されたのはその年より後であろう。現在見ることのできる『情種』は、北京図書館（国家図書館）と上海図書館の二カ所に所蔵されており、本稿では、北京図書館のもの[17]のものを使用した。「劉東山」は巻６に所収され、本文の文字は『九籥前集』と完全に一致している。

最後に馮時可の『馮元成選集』巻46に所収された「書劉東山事」を挙げる。管見のかぎりこの文章について触れたものはまだない。馮時可、字は敏成といい、号は元成である。宋懋澄と同じ松江華亭の人で隆慶５（1571）年の進士。この『馮元成選集』はそれまでの彼の出版した詩集、文集をまとめたものである。

「初刻」とその他４種の文言資料の関係でわかっているのは次の通りである。文末の記述に

よって、宋懋澄の文章を潘之恒・馮時可がみたことははっきりしている。潘之恒が最後に「…宋叔意が言った。「以前瑯琊の王司馬が自らこのことについて述べた」と。宋叔意諱は新、雲間の奇士であり、彼の記した野史は大変すばらしい。當代の小説家の第一手である。[18]」と記し、馮時可も「この事は瑯琊の王司馬や私の友人の宋尚新らに述べたものがあって…[19]」と述べていることから、宋懋澄の「劉東山」が先であることは確かである。また、宋存標は宋懋澄の甥であり、『情種』が刊行されたのも宋懋澄の死後と考えられるので、宋懋澄の「劉東山」のほうが先と考えて良いだろう。以上のことから、この文言４種の中で最も早いのは宋懋澄のものだといえる。

文字の異同について

韓氏は自説の根拠として以下の五カ所を指摘している。以下『九籥集』は「九」、『亘史』は「亘」、『馮元成選集』は「馮」と表し、付属の表を参照する。

まず、12部分である。「九」では「於跗注中藏矢二十簇」とあるところを「亘」は「於両膝下藏矢二十簇」としている。ここで「初刻」をみると「兩膝下蔵矢二十簇」となっている。韓氏は、ここから「初刻」は『九籥集』ではなく、『亘史』をみたのではないかと推測する。さらに「馮」をみると「両膝下藏矢二十簇」となり、これは『亘史』と一致している。

二つめは15にあり、「九」では「箭房中新矢數十餘」となっているものが、「亘」では「箭房中新矢二十餘」とあり、「初刻」では「箭房中新矢二十餘枝」としている部分である。これの部分は「馮」にはない。この事例も前のものと同じ推測ができるとする。

三つめ22では、「九」が「晩遂同下旅中」としているところを「亘」は「晩遂同下旅店」とし、「初刻」は「是夜一同下了旅店」としており、前２例と同様の事例である。「馮」にはこの部分はない。

35から36にかけての四つ目も同じ事例であり、「九」が「東山曉事人、腰間騾馬錢一借」としているところは、「亘」では「東山曉事人、腰間騾馬錢快送」とし、さらに「初刻」では「東山曉事人、腰間騾馬錢快送我罷」となっている。「馮」では「騾馬錢快送」で一つめの例と同じく「亘」と一致する。

５つめの例は71にあり、「九」では「舉火烘煎餅自啗」とあるが、「亘」は「舉火作煎餅自啗」、「初刻」が「煽起炭火做煎餅自啖」としている。「馮」にはこの部分はない。韓氏は、「亘」の「作」という字を「初刻」が俗字に変えているという意味で、これは前の４例とは少し異なるとしている。

以上の五カ所が、『初刻拍案驚奇』と『亘史』の文字は一致するが『九籥前集』とは異なる部分である。以上のことから『九籥前集』『亘史』以外の資料が発見されない限り、三者の関係から導かれる結論は、韓氏の述べるように、「『初刻拍案驚奇』は『亘史』に拠った」ということになろう。韓氏はこれまでの研究では気づかれていなかった点を指摘しており、注目するべきであろう。

しかし、よく考えてみれば、『亘史』所収の「劉東山」は宋懋澄のものをふまえていたことがはっきりしているのであり、『初刻拍案驚奇』を編纂した過程で参照されたのは『亘史』に間違いないとしても、やはりそれをたどっていけば宋懋澄のところにたどり着くのである。

「書劉東山事」を加えての再検討

韓氏の説をふまえた上で、もう一つの馮時可によるテキストを加えて考えてみる。

表の２部分で、「初刻」に「人號他連珠箭」とある部分は、「馮」でも「人號曰連珠箭」とするが、「九」「亘」では「自號連珠箭」としている。ここは「初刻」と「馮」だけが一致しているので、「初刻」は馮時可のものも参照したといえるかといえば、一致がただ一カ所であるから難しいであろう。しかし、もしかすれば「自」を「人」とした「劉東山」の別テキストがあったのかもしれない。もう一つの可能性として、「初刻」を編纂した者は「人」々が劉東山のことを連珠箭と呼んでいたほうが、自分で名乗っていたとするよりも良いと判断して字を改めたのではないか、とも考えられる。

この話の時代設定は、嘉靖年間（1522〜1566年）であり、劉東山は三輔で盗賊を捕らえる仕事をしていた。三輔とは北京の周辺をいう。彼の住まいは、河間交河縣（現在の河北省）で、『馮元成選集』「書劉東山事」（以下「馮・劉東山」）でもこれらの基本的な設定は共通している。

内容的な違いの一つめは、付属の表の番号８から10にかけてである。「馮・劉東山」は宋懋澄の「劉東山」で描かれている劉東山が都での腕自慢をする場面がそっくりない。この部分に呼応する57の少年が劉東山に自分の行動の理由を説明する場面でも、劉東山を順成門で見かけたとは書かれず「自譽太過」とだけある。

27から30にかけても、「馮・劉東山」では少年が弓を引く様子は詳しく描かれない。

また、49から50及び70から71にかけての部分でも、「馮・劉東山」では男達や十八兄が酒を飲む様子は簡略に書かれるだけである。

以上の、盗賊（とおもわれる男達）の細かな描写は、「馮・劉東山」よりも宋懋澄の「劉東山」のほうにみられ、「馮・劉東山」の方がより簡略である。

「馮・劉東山」は、劉東山が盗賊に懲らしめられねばならなかった理由となる場面がなく、それは後の少年の台詞の中で簡単にしか説明されないが、これでは、全体の構成からみて、バランスが失われているように思われる。因果関係がぼやけてしまうのである。また、少年が劉東山に自分の弓の腕をみせつける場面が「馮・劉東山」で詳細に描写されないのも、劉東山が少年を恐れる過程がはぶかれてしまい、説得力を欠いている。

これらの「簡略から詳細」への変化ではなく、「詳細から簡素」という変化は、馮時可の言葉を信じれば、自分の聞き取った話に近づけた結果と推察できよう。

この「詳細から簡素」への変化の理由を見つけ出すのは極めて困難であるので、この問題を留保して、次は、内容の増減ではなく、両者が全く異なる部分について検討したい。

番号62には、「馮・劉東山」にあって、宋懋澄の「劉東山」には全くみられない、少年のせりふがある。

> あなたは私をお疑いになり、私を侮辱なさるのですか。世の中の盗賊を憎む人たちは、盗賊というのは自分の物でない物を盗んでいるといいます。しかし（そうであるならば）今の役人もみな（自分の物でない物を盗むのだから）盗賊のようなものです。彼らは民から搾取しますが、私たちは商人から取ります。彼らは貧しい者から搾取しますが、私たちは金持ちから取ります。私たちの方がすこしはましと思います。もし、取ったものを貯めておいてどこにも使わず自分たちが潤ってしまえば、徳に背くこととなり、造物

> 者から罰せられるでしょう。ですから私は余分なものは無くして、罪を軽くして、徳を償うようにしているのです。

これは、劉東山から以前強奪した金を十倍にして返そうとする少年の申し出を劉東山が受けられずにいる場面で少年が語った言葉である。彼は、盗賊である自分たちを役人と比較してもまし、だと考えている。そして、自分たちは金持ちから富を得ているのであるし、得た富をため込んでいてはならないと考えている故に、劉東山に金を与えるのであって、遠慮すべきではないといっているのだ。自らを義賊と定義しているのである。

これを受け入れたことは劉東山のその後のふるまいに影響を与える。最後の部分75では、

> 十人が去ってから劉東山はため息をつきながら言った。「つまるところ富貴というものは不祥なものだ。まして千金を盗賊から得るとは。あいつらはそれでも造物主を畏れていた。私はただ心配し疑うこともなく、何も考えずに千金を受け取ってしまって良いものだろうか。」と。そのまま金を親戚や貧しい者たちに渡してしまい、妻子を別の場所に移してしまい、自分は終南山に入って道教の修行をし、その後どうなったのかわからない。

と、書かれている。

劉東山は、盗賊から得た金を人に与えて、自分は家族を捨て、終南山に入る。

また、結末が「終わる所を知らず」となっていることから、この話が実在の劉東山についての記憶を伝えたものというよりも、フィクションの世界に転じていることがわかるだろう。

宋懋澄によれば、これは瑯琊の王司馬から聞いた話だという。馮時可は、彼らの話があることを知った上で、以上のような変化を加えた「劉東山」を記した。先ほど指摘した、内容の簡素化も、通常物語はより詳しくなるのが自然であるにも関わらず行われた改変である。この結末の変化も、原因は直接話をきいたことが原因であると考えるのが最も腑に落ちる。馮時可は最後に「最近交河から来た者がこのことを言っているのに出会い、さらに詳しかったので書き記して、欲の深い者に対して警告するのである[20]」と記している。これは、少年自身は劉東山が自分を誇ったことを戒めたということに重点を置いている宋懋澄のものや「初刻」とはいささか視点が異なっている。

なお、この改編の意味すること、時代的思想的背景についての考察は、稿を改めて行いたい。

宋新とは誰か

さて、ここで韓論文の検証へと話を戻したい。

先に筆者は韓氏の「『初刻拍案驚奇』の「劉東山」は『亘史』に拠った」という説を紹介し注目に値すると述べた。ここでは、韓氏のとなえる「『九籥集』所収の「劉東山」は宋懋澄の手によるとは限らない」という説について異論を述べたい。

韓氏は、『亘史外紀』巻４「劉東山遇侠事」の末尾の部分に着目する。そこには「…宋叔意が言った。『以前瑯琊の王司馬が自らこのことについて述べた』と。宋叔意諱は新、雲間の奇士であり、彼の記した野史は大変すばらしい。當代の小説家の第一手である。」と記されてい

る。筆者は、ここでいう「宋新」とは宋懋澄を指していると考え、これまで疑問を抱いてこなかった。

実は、『亘史[21]』には、『九籥集』に所収されていた文章が数篇[22]収められている。そして、潘之恒はそのうちの二篇について、「宋新」という人物によるものとしている。その二篇がこの「劉東山遇侠事」と『亘史雑紀』巻４　文部の「呉歌[23]」である。

韓氏は、これまで誰も注意をはらってこなかったこの「宋新」、字は「叔意」という雲間（現在の上海市松江）出身の人物に着目し、一つの推論をした。

韓氏は、『亘史』には他にも宋懋澄による文が収められていることから「潘之恒が「劉東山遇侠事」の原作者を間違えて、（それはすなわち）宋懋澄の書いたものを宋新の作と間違えたということはない[24]。」とする。さらに、『亘史』は萬暦40（1612）年に成立したので、宋新が泰昌元（1621）年[25]に亡くなった宋懋澄のことであるならばまだ生存しているはずで、その人物に対して「諱」という語を使うのは適当ではないと述べる。韓氏はさらに、宋懋澄の父親は字を叔然といい、宋新は字を叔意というので、排行が同じであり[26]父と宋新は同世代であることを示しているから、宋新は宋懋澄の一世代上の一族の者ではないか、と推察している[27]。そして、宋懋澄の一族の者（韓氏の推察通りであれば宋懋澄のおじにあたる）である宋新が書いた文章が、（そのおいにあたる）宋懋澄によって保存され、それを呉偉業らが誤って、まるで宋懋澄のものであるかのように『九籥別集』に引き継いだ、というのが韓氏の推測の結論である。

確かに、『亘史』と『九籥集』のみを見た限り、韓氏の推測は、間違っているとまでは言い切れない。

これは、一見文字の脱落や書き間違いによるささいな問題のようにも思える[28]。しかし、仮に宋新という人物が実在した場合、彼は潘之恒によって「當代小説家第一手」と評された人物であるから、この時代の文言小説を考える上で重要な人物といえ、ぜひとも検討しておかなければならない。そこで、筆者は「宋新」について調査した。以下がその結果である。

まず、「宋新」字は叔意、という人物は当時存在していたのであろうか。韓氏よりも調査の範囲を広げて検討してみたい。

管見の限り確認したところ、「宋新」については未詳であるが、字を「叔意」という人物は宋懋澄の周辺に確かに存在する。

宋懋澄、潘之恒の両者と交遊のあった銭希言の文集中には「宋叔意」という人物の名が数カ所に見える。たとえば、『織里草』付録に「宋太學叔意書」があり、その下には「諱尚新雲間人」とある。ここから宋尚新、字を叔意という人物がいたことがわかるだろう。この他にも銭希言に「宋母張太君節行篇　爲叔意賦[29]」がある。

しかし、細かな例を一つ一つ挙げるまでもなく、銭希言の『九籥集』の序文[30]をみれば、「…二十年来の我々のグループで才能があって優れている者といえば、宋幼清に勝る者はない。幼清氏はもとの字を叔意といい…[31]」とあり、宋懋澄のもとの字が叔意であったことがわかる。

さらに、馮時可の「劉東山遇侠事」には、「この事は瑯琊の王司馬や私の友人の宋尚新らに述べたものがあって…[32]」とあり、同様の話が「宋尚新」によって書かれていたことを示している。さらに同巻50「宋貢士堯兪傳」には「・・・公（宋堯兪）が無くなって數年、幼子の尚新はやっと弱冠にして…[33]」とある。宋堯兪とは宋懋澄の父である。そうであれば、宋尚新は宋懋澄を指すのは間違いないであろう。

馮時可と銭希言、宋懋澄の三人は互いに交遊があった。彼らの間では宋懋澄に対して、尚新という名を改名後も依然として用いることがあったのだろう。「劉東山」が他の人物、すなわち韓氏のいう「宋新」によって書かれていたのならば、わざわざ馮時可が「劉東山」の書き手の一人として宋尚新の名を出したことは説明がつけにくい。以上のことから、潘之恒のみが「劉東山」の書き手として記した「宋新」という人物が実在した可能性はかなり低いといえるだろう。

今回筆者は宋懋澄の息子の書いた行状[34]や宋懋澄と交際があったと認められる人物の文集、地方志を含めて改めて確認したが、未だ宋新に該当する人物を見つけられていない[35]。

筆者の現段階の結論として、韓氏の推定する作者宋新は、（今後新しい資料が見つかる可能性は否定できないが）おそらくは宋懋澄その人のことである可能性が限りなく高い[36]。そうであれば、宋新とは、宋尚新の「尚」の字が脱落したとみるのが妥当であろう。しかし、韓氏の指摘した宋新によるものとされるものが他に２篇あり、それら全てが「尚」の脱落とするのも問題が残る。可能性は低いとはいえ、留意せねばならない問題であろう。

おわりに

本稿の目的は、韓氏の説の検討とこれまで取り上げられることの無かった「劉東山」のテキストを紹介し、他の「劉東山」と比較することである。いずれにしても、これまでわかっている文言で書かれた「劉東山」の元になっているのは宋懋澄のものであることに変わりない。

韓氏の指摘した、『初刻拍案驚奇』がもとにしたのは『亘史』の「劉東山」であったという説は、今みられる資料の範囲では、肯定されるのが妥当であり、今後の「三言二拍」研究の中に取り入れられるべきものである。しかし、氏が指摘した宋新という人物の存在については、疑問が残る。

本稿が事実の指摘と韓氏の説の検討に終始したのは、次に「劉東山」の話の背景について論ずるためである。

馮時可の『馮元成選集』に収められた「劉東山遇侠事」には、他テキストには見られない部分があり、その背景については、さらに検討を続ける必要がある。馮時可は、潘之恒とも交遊があり、かつ宋懋澄とも親しかった。彼らの間で「劉東山」のような話が共有されていたことは想像に難くない。しかし、その改編が実際に聞き取った話に基づいているのであれば、文人の間で共有されていた「劉東山」と民間で語られていた「劉東山」が存在していたことを示しており、更なる分析をすることで、当時の社会において物語がどのように伝えられていたのかを知る手がかりにもなろう。このことは、すなわち、白話小説となって多くの人に享受されていったこの物語の生命力の源を探ることになるだろう。

注

１復旦大学出版社　2006年

２前掲書454頁から488頁に掲載される。原載は『复旦学报(社会科学版)』2004年第１期

３なお、劉東山という人物は実在しており、『明史』中にその名がみえる。(『明史』巻95刑法三、巻114「孝宗孝康張皇后傳」、巻182「劉大夏傳」、巻202「唐龍傳」、巻207「劉世龍傳」、巻207「徐申傳」、巻300「張巒傳」) しかし、今回とりあげる一連の白話・文言による「劉東山」に登場する劉東山とは直接関わりがあるとは考えにくく、本稿では歴史上の人物とは結びつけずに論考を進めた。

４小川陽一『三言二拍本事論考集成』227頁

５詳しくは拙論「『九籥集』について―新資料を試用した版本及び作者についての再検討」(『古典小説研究』第９号　2004年５月) に述べる。

６宋有『九籥集』、如稗官家劉東山・杜十娘等事、皆集中所載也。

７此与劉東山事盖彷彿焉。

８『明代徽州文学研究』312頁から338頁及び454頁から456頁

９嘉靖45(1565)～崇禎元(1628)年。字は太初。江寧の人。萬暦26(1598)年の進士。この序文は萬暦40年のものである。

１０ただし、字形は酷似している。

１１先子亘史一書、輯於晩年、嘗謂零星冗醉、亟録亟梓、恐日之不足、以故多未竟之業。嗟嗟、今已矣。板箧散之四方、既梓者尚難羅致、而何有於残編亂帙耶。茲梓一如顧太史序節、而目之以俟後之捜補。惟譚部単行、亦先子意也不綴入。天啓丙寅重陽日、不肖男弼亮百拝謹識。

１２全国漢籍データベースに拠る。これらは未見である。

１３注５参照。

１４1547～1626年。字は本寧、京山の人。隆慶２(1568)年の進士。

１５『九籥別集』も続修四庫全書、四庫全書禁燬書叢刊に収められている。

１６乾隆『奉賢縣志』巻６文苑

１７北京図書館古籍珍本叢刊65、書目文献出版社

１８表77部分。「…宋叔意云、曾見瑯琊王司馬親述此事。宋叔意諱新、雲間奇士、其所記野史甚佳、是當代小説家第一手也。」

１９表77部分。「此事瑯琊王司馬及余友宋尚新皆有述…」

２０表77部分。

２１ここでいう『亘史』とは、韓氏の使用したものを指す。先に本文中で述べたように韓氏は天啓『亘史』を使用しているがここでの検証に支障はない。

２２全部で５篇確認している。

『九籥前集』巻１「聴呉歌記」、『九籥前集』巻11稗「劉東山」、『九籥集文』巻５傳「負情儂傳」、『九籥集文』巻10稗「鬼張指揮」、『九籥集文』巻１「眞娘墓記」が、それぞれ、『亘史雑篇』巻４文部「呉歌」、『亘史外紀』巻４侠部「劉東山遇侠事」、『亘史内紀』巻11貞部烈餘「負情儂傳」、『亘史外篇』巻１方部「鬼張指揮」、『亘史外紀』巻22艶部「呉艶」として収録される。

２３『九籥前集』巻１「聴呉歌記」

２４『明代徽州文学研究』467頁「…潘之恒当不至于将《刘东山遇侠事》的原作者弄错,即将宋懋澄所作误为宋新作。」

２５韓氏は宋懋澄の卒年を天啓元（1621）年とするが、筆者はその説を誤りだと考えるので、泰昌元年とした。詳しくは注５に挙げた拙論に述べる。

２６韓氏は「兄弟行」だと述べている。宋懋澄の伯父・堯咨の字は中允である。この場合、父宋堯兪とその兄宋堯咨の共通している「堯」の方が重要と思われる。韓氏は字の叔の字が共通しているのでこう述べるのだろう。韓氏が何を述べたいのかはっきりしないが、今は韓氏の述べたまま紹介する。

２７さらに韓氏は次のような記述を指摘して推測を補強している。『九籥集文』巻６「先府君本傳」に、宋懋澄が８才の時いったん「尚新」と改名したがまもなく「牽于昆仲（兄弟とかかわってしまう）」であるから元の名に戻したとある。したがって、韓氏は宋新は宋懋澄の一族で、父親と同じ世代の者だと推測したのである。

２８仮に、宋新が宋尚新の尚の脱落による表記だとしても、韓氏があくまでも宋新という人物がいたことを前提として論を進めている以上、本稿では、宋新という「劉東山」に関係した人物が存在したか否かについて検証する必要があると判断した。

２９『織里草』所収。張という姓は宋懋澄の母のそれと一致する。また『荊南詩』巻上に、「宋三叔移家薊門、余方入楚贈別二十四韻」がある。

３０『討桂編』巻14

３１…二十年来吾黨之才而奇者、則莫如宋君幼清、幼清故字叔意…

３２此事瑯琊王司馬及余友宋尚新皆有述…

３３公没數年幼子尚新方弱冠

３４息子宋徵輿に宋懋澄の行状がある。『林屋文稿16巻』詩稿14巻（上海図書館蔵清康熙九籥樓刻本（詩稿配鈔）四庫全書存目叢書集部第215冊　1997年）所収。

３５さらに、朱麗霞氏の『清代松江府望族与文学研究（上海古籍出版社　2006年）』の第二章及び第三章に詳しく述べられている明末清初の宋一族に関する詳細な調査を参照しても「宋新」はみあたらない。ただし朱氏は「叔然」という宋懋澄の字には触れていない。筆者の宋懋澄とその周辺についての論考については、朱氏の詳細な調査を受けて改めなくてはならない点がある。また、朱氏の調査結果についていくつかの疑問点もある。それについては稿を改めたい。

３６ただ、潘之恒が知人であるにも関わらずなぜ宋尚新という名を宋新と記したのか、疑問が残る。また、同じ宋懋澄の「負情儂傳」には、「宋懋澄云」とあるのも、何らかの書き分けの理由があったことを思わせる。これについては調査を継続したい。

「劉東山」関連資料５種

（※『情種』については本文は『九籥集』と同じであるので本文については挙げない。ただし、他と異なる評の部分は挙げることとする。『初刻拍案驚奇』については、正話部分のみである。）

『初刻拍案驚奇』…「初」　『九籥前集』　…「九」　『亘史』　…「亘」

『馮元成選集』　…「馮」　『情種』　…「情」

『九籥前集』の句読は王利器の排印本（『九籥集』中国社会科学出版社　1984 年）に拠り、『馮元成選集』については、『九籥集』の句読を参考にした。

1	「初」　話説國朝嘉靖年間，北直隸河間府交河県一人姓劉名嶔，叫做劉東山，在北京巡捕衙門裡當一個緝捕
	「九」　劉東山，世宗時三輔捉盗人，住河間交河縣，
	「亘」　劉東山，世宗時三輔捉盗人，住河間交河縣，
	「馮」　劉東山，世宗時　於河間交河路，
2	軍校的頭。此人有一身好本事，弓馬熟間，發矢再無空落，人號他連珠箭。随你異常狠盗，逢着他便如甕中捉
	發矢未嘗空落，自號　連珠箭，
	發矢未嘗空落，自號　連珠箭，
	捉盗矢不虚發，人號曰連珠箭，
3	鰲，手到拿來。因此也積趲得有些家事。年三十餘，覺得心裡不耐煩做此道路，告脱了，在本縣去別尋生理。
	年三十餘，苦厭此業。
	年三十餘，苦厭此業。
	年三十餘，厭薄此業。
4	一日，冬底殘年，赶着驴馬十餘頭，到京師轉賣，約賣得乙百多兩銀子。交易完了，至順城門（即宣武門）
	歲暮，將驢馬若干頭，至京師轉賣，　得百金，　事完，至順成門
	歲暮，將驢馬若干頭，到京師轉賣，　得百金，　事完，至順成門
	歲暮，將驢馬若干頭，詣京師轉賣，　得百金，
5	雇騾歸家。在騾馬主人店中，遇見一箇鄰舍張二郎入京來，同在店買飯喫。二郎問道「東山何往。」
	顧騾歸，　遇一親近，道入京所以。
	顧騾歸，　遇一親近，道入京所以。
6	東山把前事説了一遍，道「而今在此雇騾，今日宿了，明日走路。」
	其人謂東山
	其人謂東山
7	二郎道「近日路上好生難行，良鄉、鄭州一帶，盗賊出没，白日劫人。老兄帶了偌多銀子，
	「近日羣盗出没，良、鄭間，　卿挾重資，
	「近日羣盗出没，良、鄭間，　卿挾重資，

8	「初」 没个做伴，獨來獨往，只怕着了道兒，放仔細些。」 東山聽罷，不覺鬚眉開動，唇齒奮揚。
	「九」 奈何獨來獨往。」 東山 鬚眉開動，唇齒奮揚，
	「亘」 奈何獨來獨往。」 東山 鬚眉開動，唇齒奮揚，
	「馮」
9	把兩隻手捏了拳頭，做一个開弓的手勢，哈哈大笑道「二十年間，張弓追討，矢無虛發，不曾撞个對手。
	舉右手拇指 笑曰 「二十年張弓追討，
	舉右手拇指 笑曰 「二十年張弓追討，
10	今番收場買賣，定不到得折本。」店中滿座聽見他高聲大喊，盡回頭來看。也有問他姓名的，道「久仰，久仰。」
	今番收拾，定不辱寞。」
	今番收拾，定不辱寞。」
11	二郎自覺有些失言，作別出店去了。東山睡到五更頭，爬起來，梳洗結束。將銀子緊縛裹肚內，
	其人自愧 失言，珍重別去。 明日
	其人自愧 失言，珍重別去。 明日
12	扎在腰間， 肩上掛一張弓，衣外跨一把刀，兩膝下藏矢二十簇。揀一个高大的健騾，騰地騎上，
	束金腰間，騎健騾，肩上掛弓，繫刀衣外， 於跗中藏矢二十簇。
	束金腰間，騎健騾，肩上掛弓，繫刀衣外， 於両膝下藏矢二十簇。
	束 腰間，騎健騾，肩上掛弓，繫刀衣外， 両膝下藏矢二十簇。 獨身南歸，
13	一鞭前走。走了三四十里，來到良鄉，只見後頭有一人奔馬赶來，遇着東山的騾，便按轡少駐。
	未至良鄉，有一騎奔馳南下， 遇東山而按轡，
	未至良鄉，有一騎馳驅南下， 遇東山而按轡，
	未至良鄉，有一騎，從俊馳来， 熟視，
14	東山舉目覷他，却是一个二十歲左右的美少年，且是打扮得好。但見：黃衫氈笠，短劍長弓。
	乃二十 左右顧影少年也， 黃衫氈笠，長弓短刀，
	乃二十 左右顧影少年也， 黃衫氈笠，長弓短刀，
	乃二十 左右 少年也， 黃衫氈笠，長弓短刀，
15	箭房中新矢二十餘枝，馬額上紅纓一大簇。裹腹闊裝燦爛，是箇白面郎君。恨人緊轡噴嘶，好疋高頭駿騎。
	箭房中新矢數十餘，白馬輕蹄，恨人緊轡，噴嘶不已。
	箭房中新矢二十餘，白馬輕蹄，恨人緊轡，噴嘶不已。
	白馬輕蹄， 噴嘶不已。
16	東山正在顧盻之際，那少年遥叫道「我們一起走路則个。」就向東山拱手道「造次行途，願問高姓大名。」
	東山轉盻之際， 少年舉手曰「造次行途，願道姓氏。」
	東山轉盻之際， 少年舉手曰「造次行途，願道姓氏。」
	東山方轉盻， 少年舉手曰「造次行途，願

17	「初」 東山答應「小可姓劉名嶽，別號東山，人只叫我是劉東山。」少年道「久仰先輩大名，如雷貫耳，小人
	「九」 既敍形迹，
	「亘」 既敍形迹，
	「馮」 各敍形迹，
18	有幸相遇。今先輩欲何往。」東山道「小可要回本藉交河縣去。」少年道「恰好，恰好。小人家住臨淄，也是
	自言
	自言
	自言
19	舊族子弟，幼年頗曾読書，只因性好弓馬，把書本丟了。三年前帶了些資本往京貿易，頗得些利息。
	「本良家子， 爲賈京師三年矣，
	「本良家子， 爲賈京師三年矣，
	「本良家子， 久賈長安，
20	今欲歸家婚娶，正好與先輩作伴同路行去，放膽壯些。直到河間府城，然後分路。有幸，有幸。」
	欲歸臨淄婚娶，猝幸遇卿， 其直至河間分路。」
	欲歸臨淄婚娶，卒幸遇卿， 其直至河間分路。」
	欲歸臨淄婚娶。」
21	東山一路看他腰間沈重，語言温謹，相貌俊逸，身才小巧，諒道不是歹人。且路上有伴，不至寂寞心上也
	東山視其腰纏，若有重物，且語動温謹，非惟喜其巧捷， 而客況當不寂然，
	東山視其腰纏，若有重物，且語動温謹，非惟喜其巧捷， 而客況當不寂然，
	東山視其腰纏，若有重物，而舉動温謹，
22	歡喜道「當得相陪。」是夜一同下了旅店，同一處飲食歇宿，如兄若弟，甚是相得。」 明日，並轡出涿州。
	晚遂同下旅中。 明日 出涿州，
	晚遂同下旅店。 明日 出涿州，
	自喜得遇良朋， 遂同逆旅。 明日 出涿州，
23	少年在馬上問道「久聞先輩最善捕賊，一生捕得多少。也曾撞着好漢否。東山正要誇逞自家手段，
	少年 問 「先輩平生捕賊幾何」， 東山
	少年 問 「先輩平生捕賊幾何」， 東山
	少年 問 「先輩平生捕賊幾何」， 東山
24	這一問揉着癢處，且量他年小可欺，便侈口道「小可生平兩隻手一張弓，拿盡緑林中人，也不記其數，
	意 少年易欺， 語
	意 少年易欺， 語
	語次頗自負其能，
25	並無一個對手。這些鼠輩，何足道哉。而今中年心懶，故棄此道路。倘若前途撞着，便中拿箇把兒你看手段。」
	「間益輕盜賊爲無能也。」
	「間益輕盜賊爲無能也。」

26	「初」少年但微微冷笑道「元來如此。」就馬上伸手過來，說道「借肩上寶弓一看。」東山在騾上遞將過來， 「九」笑語良久， 「亘」笑語良久， 「馮」
27	少年左手把住，右手輕輕一拽就滿，連放連拽，就如一條軟絹帶。東山大驚失色，也借少年的弓過來看。 因借弓把持，　張弓如引帶，　東山始驚愕，　借少年弓過馬， 因借弓把持，　張弓如引帶，　東山始驚愕，　借少年弓過馬， 少年因借弓把持，
28	看那少年的弓，約有二十斤重，東山用尽平生之力，面紅耳赤，不要說扯滿，只求如初八夜頭的月，再不能勾。 重約二十觔，極力開張，　至於赤面，　終不能如初八夜月， 重約二十觔，極力開張，　至於赤面，　終不能如初八夜月， 劉面赤手顫，　終不能引，
29	東山惺恐無地，吐舌道「使得好硬弓也。」便向少年道「老弟神力，何至于此。非某所敢望也。」少年道 乃大駭異，　問少年神力，「何至於此。」　曰 乃大駭異，　問少年神力，「何至於此。」　曰 乃大驚
30	「小人之力，可足稱神。先輩弓自太軟耳。」東山贊嘆再三，少年極意謙謹。晚上又同宿了。至明日又同行， 「某力殊不神，顧卿弓不勁耳。」　東山嘆咤至再，少年極意謙恭。　至　明日 「某力殊不神，顧卿弓不勁耳。」　東山嘆咤至再，少年極意謙恭。　至　明日 嘆詫，　至再明日
31	日西時過雄縣。少年拍一拍馬，那馬騰雲也似前面去了。東山望去，不見了少年。他是賊窠中弄老了的， 日西，過雄縣、少年忽策騎前驅　不見， 日西，過雄縣，少年忽策騎前驅　不見， 過雄縣，少年　策騎前驅　條忽若没，
32	見此行止，如何不慌。私自道「天教我這番倒了架也。倘是個不良人，這樣神力，如何敵得。勢無生理。」 東山始惶懼，私念彼若不良，　我與之敵，勢無生理。 東山始惶懼，私念彼若不良，　我與之敵，勢無生理。 東山始惶懼，
33	心上正如十五個吊桶打水，七上八落的。没奈何，沌混行去。行得一二鋪，遥望見少年在百步外，正弓挾矢， 行一二鋪，遙見向少年在百步外，正弓挾矢， 行一二鋪，遙見向少年在百步外，正弓挾矢， 行一二鋪，　見向少年在百步外，　挾矢，
34	扯個滿月，向東山道「久聞足下手中無敵，今日請先聽箭風。」言未罷，颼的一聲，東山左右耳根但聞肅肅 向東山曰「多聞手中無敵，今日請聽箭風。」　言未已，　左右耳根但聞蕭蕭 向東山曰「多聞手中無敵，今日請聽箭風。」　言未已，　左右耳根但聞蕭蕭 向東山曰「聽箭。」　言未已，　箭從耳根，

35	「初」如小鳥前後飛過，只不傷着東山。又將一箭引滿，正對東山之面，大笑道「東山曉事人，腰間騾馬錢
	「九」如小鳥前後飛過。　又引箭曰　「東山曉事人，腰間騾馬錢
	「亘」如小鳥前後飛過。　又引箭曰　「東山曉事人，腰間騾馬
	「馮」　直過，　又引箭曰　「若　曉事人，　騾馬錢
36	快送我罷，休得動手。」東山料是敵他不過，先自慌了手脚，只得跳下鞍來，解了腰間所繫銀袋，雙手捧着，
	一借。」　於是東山下鞍，解腰間囊，
	快送。」　於是東山下鞍，解腰間囊，
	快送。」　於是東山下鞍，解腰間囊，
37	膝行至少年馬前，叩頭道「銀錢謹奉好漢將去，只求饒命。」少年馬上伸手提了銀包，大喝道
	膝行至　馬前　獻金乞命。　少年受金，　叱曰
	膝行至　馬前　獻金乞命。　少年受金，　叱曰
	至　馬前　獻金。　少年受金，　叱曰
38	「要你性命做甚。快走，快走。你老子有事在此，不得同兒子前行了。」掇轉馬頭，向北一道烟跑，
	「去，　乃公有事，　不得同兒子前行。」　轉馬面北，
	「去，　乃公有事，　不得同兒子前行。」　轉馬面北，
	「去，　乃公有事，　不得同兒子前行。」　轉馬面北，
40	但見：一路黃塵滾滾，霎時不見踪影。東山呆了半响，捶胸跌足起來道「銀錢失去也罷，叫我如何做人。
	唯見黃塵　而已。　東山撫膺惆悵，
	惟見黃塵　而已。　東山撫膺惆悵，
	唯見黃塵一道而已。　東山撫膺惆悵，
41	一生好漢名頭，到今日弄壞，真是張天師喫鬼迷了。可恨。可恨。」垂頭喪氣，有一步没一步的，空手歸交河。
	空手歸交河，
	空手歸交河，
	歸
42	到了家裡，與妻子説知其事，大家懊恼一番。夫妻兩个嘀量，收拾些本錢，在村郊開個酒鋪，賣酒營生，
	收合餘燼，夫婦賣酒於村郊，手絶弓矢，
	收合餘燼，夫婦賣酒於村郊，手絶弓矢，
	至交河斥餘業，　市酒村郊，手絶弓矢。
43	再不去張弓挾矢了。又怕有人知道，壞了名頭，也不敢向人説着這事，只索罷了。
	亦不敢向人言此事。
	亦不敢向人言此事。
44	過了三年，一日，正値寒冬天道，有詞爲證：霜瓦鴛鴦，風簾翡翠，今年早是寒少。矮釘明窓，側開朱戸，
	過　三年，
	過　三年，
	過　三年，

45	「初」断莫亂教人到。重陰未解，雲共雪商量不少。青帳垂氈要密，紅幙幕放圍宜小。　調寄『天香前』。 却説冬日間，東山夫妻正在店中賣酒，只見門前來了一夥騎馬的客人，共是十一个。箇箇騎的是 「九」　冬日　有狀士十一人， 「亘」　冬日　有狀士十一人， 「馮」　値歲暮，　有十餘騎，
46	自鞴的高頭駿馬，鞍轡鮮明。身上俱緊束短衣，腰帶弓矢刀劍。次第下了馬，走入肆中來，解了鞍輿。 人騎駿馬，　身衣短衣，　各帶弓矢劍，　入肆中　解鞍沽酒， 人騎駿馬，　身衣短衣，　各帶弓矢劍，　入肆中　解鞍沽酒， 各持利器，　入肆　沽酒，
47	劉東山接着，替他赶馬歸槽。後生自去剉草煮荳，不在話下。内中只有一箇未冠的人，年紀可有十五六歲， 中一　未冠人， 中一　未冠人， 中一　未冠人，
48	身長八尺，獨不下馬，對衆道「弟十八自向對門住休。」　衆人都答應一聲道「咱們在此少住，便來伏侍。」 身長七尺，帶馬持器，謂同輩曰「第十八，向對門住。」皆應諾曰　「少住便來周旋。」 身長七尺、帶馬持器、謂同輩曰「第十八，向對門住。」皆應諾曰　「少住便來周旋。」 身長七尺，　謂同輩「第十八兄，向對門住。」　「少住便來周旋。」
49	只見其人自走對門去了。十人自來喫酒，主人安拜些鷄、豚、牛、羊肉來做下酒。傾尽了六七壜的酒， 是人既出，　十人向罏傾酒，盡六七壜，須臾之間，狼飡虎嚥，算來喫勾有六七十觔的肉， 是人既出，　十人向罏傾酒，盡六七壜，鷄、豚、牛、羊肉，噉數十斤殆盡， 是人既出，　十人向罏傾酒，　六七壜，須臾盡，
50	又教主人將酒殽送過對門楼棲上，與那未冠的人喫。衆人喫完了店中東西，還叫未暢， 遂開皮囊，取出鹿蹄、野雉、燒兎等物，笑道「這是我們的東道，可叫主人來同酌。」 更於皮囊中，取鹿蹄、野雉及燒兎等，　呼主人同酌。 更於皮囊中，取鹿蹄、野雉及燒兎等，　呼主人同酌。 更於皮囊中，取鹿蹄　等，　呼主人同酌。
51	東山推遜一回，纔來坐下。把眼去逐个瞧了一瞧，瞧到北面左手那一人，氈笠兒垂下，遮着臉不甚分明。 東山　初下席，　視北面左手人， 東山　初下席，　視北面左手人， 東山　初下席，　視北面左手人，
52	猛見他擡起頭來，東山仔細一看，嚇得魂不附體，只叫得苦。你道「那人是誰。正是在雄縣劫了騾馬錢去的那一个同行少年。東山暗想道『這番却是死也。我些些生計，怎禁得他要起。況且前日一人尚不敢敵， 乃往時馬上少年也， 乃往時馬上少年也， 往時馬上少年也，
53	今人多如此，想必个个是一般英雄，如何是了。』心中忒忒的跳，眞如小鹿兒撞，面向酒杯，不敢則一聲。 益生疑懼，自思産薄，何以應其復求，　面向酒盃，不敢出聲。 益生疑懼，自思産薄，何以應其復求，　面向酒盃，不敢出聲。 益生疑懼，　面向酒盃，不敢出聲氣。

54	「初」衆人多起身與主人勸酒。坐定一回，只見北面左手坐的那一个少年把頭上氈笠一掀，呼主人道
	「九」　諸人競來勸酒，　既坐定，　往時少年擲氈笠，呼東山曰
	「亘」　諸人競來勸酒，　既坐定，　往時少年擲氈笠，呼東山曰
	「馮」　良久少年呼東山曰
55	「東山別來無恙麽。往昔承挈同行周旋，至今想念。」東山面如土色，不覺雙膝跪下道「望好漢恕罪。」
	「別來無恙，　想念頗煩。」東山失聲，　不覺下膝。
	「別來無恙，　想念頗煩。」東山失聲，　不覺下膝。
	「別來無恙。」　東山　不覺下膝。
56	少年跳離席間，也跪下去，扶起來挽了他手道「快莫要作此状，快莫要作此状，羞死人。昔年俺們衆兄弟
	少年　持其手曰「莫作莫作，　昔年諸兄弟
	少年　持其手曰「莫作莫作，　昔年諸兄弟
	少年　持其手曰「莫作莫作，　昔年
57	在順城門店中，聞卿自誇手段天下無敵。衆人不平，却教小弟在途間作此一番輕薄事，與卿作耍，
	於順成門，　聞卿自譽，　令某途間輕薄，
	於順成門，　聞卿自譽，　令某途間輕薄，
	卿途間自譽太過，　故作小技苦卿，
58	取笑一回。然負卿之約，不到得河間。魂夢之間，還記得與卿並轡任丘道上。感卿好情，今當還卿十倍。」
	今當十倍酬卿。然河間負約，魂夢之間，時與卿並轡任丘路也。」
	今當十倍酬卿。然河間負約，魂夢之間，時與卿並轡任丘路也。」
	今當十倍酬卿耳。」
59	言畢，即向囊中取出千金，放在案上，向東山道「聊當別來一敬，快請收進。」東山如醉如夢，呆了一响，
	言畢，　出千金　案上，　勸令收進。
	言畢，　出千金　案上，　勸令收進。
	言畢，　出千金　案上，　勸令收進。
60	怕又是取笑，一時不敢應承。那少年見他遲疑，拍手道「大丈夫豈有欺人的事。東山也是个好漢，
61	直如此膽氣虛怯。難道我們弟兄直到得真个取你的銀子不成。快收了去。」劉東山見他説話説得慷慨，
	東山此時，
	東山此時，
	東山此時，
62	料不是假，方纔如醉初醒，如夢方覺，不敢推辞。
	如將醉將夢，欲辞不敢，
	如將醉將夢，欲辞不敢，
	如在醉將夢，遜謝不敢，少年遽曰「子疑我耶，汚我耶。世惡緑林謂取非其有，今冠裳者盡緑林也。第彼取民，余取商，彼取貧，余取富，差覺爲優，若夫積，而不散自潤，自背徳，則造物加罪等耳。我故斥其餘，以鮮罪，而償徳。」

63	「初」 走進去與妻子說了，就叫他出來同收拾了進去。安頓已了，兩人嘀議道「如此豪傑，如此恩德， 「九」 與妻同舁而入， 既已安頓， 「亘」 與妻同舁而入， 既已安頓， 「馮」 東山乃與妻同舁而入， 既已安頓，
64	不可輕慢。我們再須殺牲開酒，索性留他們過宿頑耍幾日則箇。」東山出來稱謝，就把此意與少年說了， 復殺牲開酒， 請十人過宿流連， 復殺牲開酒， 請十人過宿流連， 復烹鮮開酒， 留十人宿，
65	少年又與衆人說了。大家道「即是這位弟兄故人，有何不可。只是還要去請問十八兄一聲。」 皆曰 「當請門十八兄。」 皆曰 「當請門十八兄。」 皆曰 「當請門十八兄。」
66	便一齊走過對門，與未冠的那一箇說話。東山也隨了去看，這些人見了那箇未冠的，甚是恭謹。 卽過對門， 與未冠者道主人意， 卽過對門， 與未冠者道主人意， 卽過對門， 與未冠者道主人意，
67	那未冠的待他衆人甚是莊重。衆人把主人要留他們過宿頑耍的話說了，未冠的說道「好，好，不妨。 未冠人云 未冠人云 未冠人云
68	只是酒醉飯飽，不要貪睡，負了主人殷勤之心。少有動靜，俺腰間兩刀有血喫了。」衆人齊聲道 「醉飽熟睡，莫負慇懃， 少有動靜， 兩刀有血喫也。」 「醉飽熟睡，莫負慇懃， 少有動靜， 兩刀有血喫也。」 「醉飽熟睡，莫負慇懃， 少有動靜， 兩刀有血喫也。」
69	「弟兄們理會得。」東山一發莫測其意。衆人重到肆中，開懷再飲，又携酒到對門樓上。衆人不敢陪， 十人更至肆中劇醉， 携酒對門樓上， 十人更至肆中劇醉， 携酒對門樓上， 十人更至肆中劇醉， 携酒對門樓上，
70	只是十八兄自飲。算來他一個喫的酒肉，比得店中五個人。十八兄喫闌，自探囊中取出一個純銀笊籬來， 十八兄自飲， 計酒肉畧當五人， 復出銀笊籬， 十八兄自飲， 計酒肉畧當五人， 復出銀笊籬， 十八兄自飲，
71	煽起炭火做煎餅自啖。連啖了百餘個，收拾了，大踏步出門去，不知所向。直到天色將晚，方纔回來， 舉火 烘煎餅自啗， 夜中獨出， 舉火 作煎餅自啗， 夜中獨出，

72	「初」　重到對門住下，竟不到劉東山家來。衆人自在東山家喫耍。走去對門相見， 「九」　離明重到對門，　終不至東山家， 「亘」　離明重到對門，　終不至東山家 「馮」　居三日十人別去，十八兄終不至東山家，
73	十八兄也不甚與他們言笑，大是倨傲。東山疑心不已，背地扯了那同行少年問他道「你們這個十八兄， 亦不與十人言笑。　東山微叩　「十八兄是何人。」 亦不與十人言笑。　東山微叩　「十八兄是何人。」 東山微叩　「十八兄是何人。」
74	是何等人。」少年不答應，反去與衆人說了，各各大笑起來。不說來歷，但高聲吟詩曰「楊柳桃花相間出， 衆客大笑，　直高咏曰「楊柳桃花相間出， 衆客大笑，　直高咏曰「楊柳桃花相間出， 衆客大笑，　直高咏曰「楊柳桃花相間出，
75	不知若個是春風。」吟畢，又大笑。住了三日，俱各作別了結束上馬。未冠的在前，其餘衆人在後，一擁而去。 不知若個是春風。」　至三日而別。 不知若個是春風。」　至三日而別。 不知若個是春風。」　十人去後東山嘆曰「卒富貴不祥，況千金得自盗乎。此輩尚畏造物，我但罔顧忌，居然享千金乎。」遂盡散與親黨貧者，移妻子，入終南山訪道，不知所終。
76	東山到底不明白。却是驟得了千來兩銀子，手頭從容，又怕生出別事來，搬在城内，另做營運去了。後來見人說起此事，有識得的道「詳他兩句語意，是個‘李’字；況且又称十八兄，想必未冠的那人姓李，是個爲頭的了。看他對衆的說話，他恐防有人暗算，故在對門，兩處住了，好相照察。亦且不與十人作伴同食，有个尊卑的意思。夜間獨出，想又去做甚麽勾當來，却也没處查他的確。」那劉東山一生英雄，遇此一番，過後再不敢說一句武藝上頭的話，棄弓折箭，只是守着本分營生度日，後來善終。可見人生一世，再不可自恃高強。那自恃的，只是不曾逢着狠主子哩。有詩単說這劉東山道： 生平得盡弓矢力，直到下場逢大敵。　人世休誇手段高，霸王也有悲歌日。 又有詩說這少年道： 英雄從古輕一擲，盗亦有道眞堪述。笑取千金償百金，途中竟是好相識。
77	曾見瑯琊王司馬親述此事。 宋叔意云『曾見瑯琊王司馬親述此事。』亘史云「十八童最奇，以無作爲，更見豪宕，却多了少有動静，両刀有知吃二語，何其浅露彼狡童，何渠出此伎倆，夜中所行秘密，乃爾三日而別，亦不必究竟何事，此文高手，非水滸能彷彿也。宋叔意諱新，雲間奇士。其所紀野史甚佳，是當代小說家第一手也。 此事瑯琊王司馬及余友宋尚新皆有述，而近遇交河客道之更詳，因書以警夫貪戀者。 「情」居士曰博浪一椎十日大索，不得不知椎者何人也。荊卿之刺秦王也，曰待我客與俱，不知客者何人也。今十人共飲酒肆中，過宿流連，竟不知十八兄者何人也。故知大英雄出没，特游戯人間不欲以名傳也，使其以名傳，則吾特宇宙中之一人，即其事甚奇，甚行甚異甚味，亦易盡也。鄙哉。東山幾以自衿得禍，彼少年者，爾時寧不能殺之耶，殺之無名故以千金鬻之，彼千金報母者，抑何重視此千金也。